

# 官話教科書の日本語訳に関する考察

——宮島大八の教本を中心に——

板垣友子

**要旨** 明治から昭和にかけて日本の中国語教育を民間でリードした宮島大八は、中国に7年間留学し、帰国後善隣書院を設立し、中国語教育に一生を捧げた人物である。宮島が編纂した中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』は刊行当時の日本で最も人気を博したテキストとなった。教材編纂において宮島が日本の中国語教育に残した足跡は大きい。本論文では『官話急就篇』の日本語訳本2種と、宮島自身による『急就篇』の日本語訳本の言語的特徴を比較することにより、宮島の中国語教材・中国語教育に対する考え方を明らかにし、日本の中国語教育に与えた影響について考察する。

**キーワード** 宮島大八 善隣書院 『官話急就篇』 『急就篇』

关于官话课本的译本

——以宫岛大八的课本为主——

**提要** 宮島大八是在近代日本汉语教育史上著名的汉语教育家。他曾在中国留学七年，后来从事汉语教育事业，创立了善邻学院，并引领了近代日本汉语教育事业。他曾经编写了初级汉语教材《官话急就篇》与《急就篇》，而它成为在日本最畅销的汉语课本。无论在创建汉语教育机关方面，还是在编写汉语教材方面，宮島都为近代日本汉语教育事业的巩固与发展做出了很大的贡献。笔者在这里以两本《官话急就篇》的日译本与宮島编的《急就篇》日译本为对象进行比较而指出语言特点。本论通过有关资料加以考察宮島的教育思想以及进一步了解他思想对汉语教育留下了如何影响。

**关键词** 宮島大八 善邻书院 《官话急就篇》 《急就篇》

## 前 言

宮島大八(1867-1943)は近代日本の中国語教育における先駆者、実践者として名高い人物である。宮島が編纂した『官話急就篇』(初版1904)と『急就篇』(1933)は当時の中国語教本の中でベストセラーとなった。これまで宮島教本の中国語について分析・検討してきたが、宮島は『急就篇』に自ら日本語訳を付した『急就篇総譯』(1934)を刊行しており、またそれ以前に大橋末彦と打田重治郎がそれぞれ1917年、1921年に『官話急就篇』の日本語訳の教本を出していることから、本論では宮島教本の日本語訳に着目して比較、分析していく。

### 1. 『官話急就篇』と『急就篇』

#### 1.1 宮島大八とその教本

宮島大八とはどんな人物か、まず簡単に紹介する。宮島は1867年(慶応3年)、米沢藩に生まれた。父・誠一郎は漢学を学び、藩校の講師をしていたが、戊辰戦争で幕府側についた米沢藩外交方として官軍に対抗した。しかし、明治維新後の1871年、誠一郎は勝海舟の口利きによって政府に職を得て、家族とともに上京した。13歳の時、大八は清国初代公使の何如璋の随員について漢学を学び始め、その後父・誠一郎が創立メンバーだった興亜会の活動の一環である支那語学校に入学して北京官話を学び、さらに1882年には外国語学校(東京外国語大学の前身)に編入し、1886年まで在籍した。

宮島は1887年、21歳の時に念願だった清国への留学を果たす。当時外国語学校からの政府派遣留学生はほとんどが北京で学んだのだが、個人留学だった宮島はかねてよりあこがれていた張裕釗が院長を務めている保定の蓮池書院へと向かった。張は清末の政治家で文人でもある曾国藩の高弟であり、当代きっての書家、学者として知られていた。

宮島は張の保定、武昌、襄陽、西安という転任先にも同行して学び、張が亡くなるまで7年間にわたり中国で学問を修めた。しかし、宮島は途中体を

こわして北京で1年半ほど静養しており、宮島はこの間に北京で官話を体得したのではないと思われる。

日清戦争勃発後に帰国した宮島は勝海舟のアドバイスにより、1895年に中国語と漢学を教える私塾・詠帰舎を開塾し、同時に東京帝国大学や東京外国語学校でも教鞭を執った。詠帰舎は1898年には善隣書院として拡張、改称し、現在も存続している。

宮島は生涯にわたり多くの中国語のテキスト、辞書類を編纂した。以下のようによまとめられる。

- 1897年 『官話輯要』（哲学書院）
- 1900年 『支那語独習書』（善隣書院）
- 1901～1902年 『支那語学校講義録』（善隣書院） 通信教育用テキスト
- 1902年 『官話篇』（善隣書院）
- 1904年 『官話急就篇』初版（善隣書院）
  - 『支那語速成 兵時會話』（善隣書院）
  - 『北清通話 兵時會話』（善隣書院）
  - 『清国時文 兵時告示文範』（文求堂）
- 1905年 『日華字典』（文求堂）
- 1906年 『官話急就篇』増訂四版（善隣書院）
  - 『時文類纂』（善隣書院）
- 1917年 『支那 官話文典』（善隣書院）
- 1918～1919年 『支那語講義録』（善隣書院） 通信教育用テキスト
- 1921年 『支那語會話篇』（善隣書院）
- 1933年 『急就篇』（善隣書院）
- 1934年 『急就篇総譯』（善隣書院）
- 1935年 『羅馬字急就篇』（善隣書院）
- 1935年 『急就篇発音』（善隣書院）
- 1941年 『續急就篇』（善隣書院）

このうち、『官話急就篇』増訂四版、『急就篇』は、それぞれ明治時代後期から大正にかけて、また昭和初期から日中戦争・第二次世界大戦終戦までの

日本国内での中国語教本のベストセラーであり（奥付によると、『官話急就篇』は126刷、『急就篇』は2万部）多くの教育の場で使われた、影響力が大きい教本として、中国語教育研究の面で極めて研究価値が高いと考えられる。

## 2.2 『官話急就篇』『急就篇』と日本語訳テキスト

宮島は『官話急就篇』の初版を出した2年後の1906年、改訂四版を刊行した。『官話急就篇』は「ひさしく待ち望まれた入門書として、たちまち中国語のバイブルとなった」<sup>1)</sup>のである。それ以前に宮島が出した『官話輯要』（1897）、『官話篇』（1902）ともにややレベルが高い教本であったし、それまで外国語学校や大学で使われていた『官話指南』（呉啓太・鄭永邦、1881）や『談論新編』（金国璞・平岩道知、1898）なども初心者がすぐに学べるようなレベルのテキストではなかったため、『官話急就篇』改訂四版は日露戦争直後の大陸進出ブームのなかで版を重ねた。

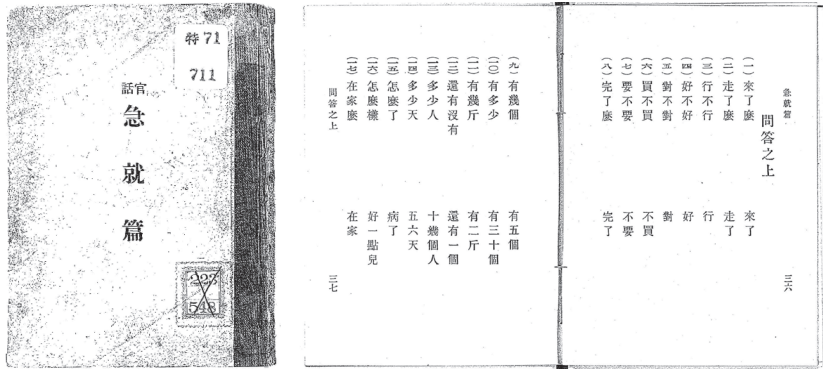
宮島は善隣書院の通信教育用テキスト『支那語学校講義録』（1901～1902）を作成していくなかで、初学者用の内容を精選した結果を『官話急就篇』に反映させたものと推測できる。“來了麼 來了”“走了麼 走了”という、リズムがよく平明で覚えやすい問答から始まるようになったのは、宮島がそれまで問答例を多数採用したなかから、入門向け教本としてふさわしいフレーズを提供することに力を注いだ結果であろう。体裁についても当時は珍しいポケット版、文字が大きい版面を取り入れて、初学者にも手に取りやすいものとなった。それまでになかったカジュアルな教本を作り出した宮島のセンスが光る一冊であり、126刷を重ねるベストセラーとなった。

『官話急就篇』から派生したさまざまなテキストが刊行されたことも、『官話急就篇』が広く受け入れられた証左であろう。1917年には山口高等商業学校教授の大橋末彦<sup>2)</sup>による『官話急就篇詳譯』（以下『詳譯』）が下関市の文

---

1) 安藤1988: 39。

2) 1906年から陸軍通訳官として中国に渡る。『官話指南を基礎とせる支那語独習書』なども出している。



『官話急就篇』初版の表紙（左）と「問答之上」冒頭（右）

（国会図書館近代デジタルライブラリーより）

英堂から出された。その「自序」によれば「恩師宮島先生の允諾を得て」とあり、善隣書院あるいは外国語学校で宮島に教えを受けたと思われる。この『詳譯』は、装丁も『官話急就篇』とまったく同じであり、「名辞」「問答」「散語」の日本語訳のみを示している。右に丸が付されている部分はカッコ内に対照する中国語があり、文法の説明や中国の習慣なども小さく記されている。『詳譯』は山口高等商業学校で用いた教案であると序にあるが、手元にある『詳譯』は1931年に出た第36版である。1917年の初版から長い間売れ続けていることから、この種のテキストの需要が高かったことがわかる。

1921年には大連の大阪屋号書店から、打田重治郎<sup>3)</sup>による『急就篇を基礎とせる支那語独習』（以下『基礎』）が刊行された。こちらはもとの『官話急就篇』の中国語に日本語の文法解説と訳を加えた参考書になっている。『基礎』は大連で出されたものであり、手元には初版の影印しかなく、どれほど普及したのかは不明である。打田は息子の学習を助けるためにつくったと序に記しているが、発音についてもページを割き、練習問題も付け、解説も詳しくした結果、300ページを超えるボリュームとなっている。

3) 1906年から陸軍通訳官として中国に渡る。『官話指南を基礎とせる支那語独習書』なども出している。

『官話急就篇』『急就篇』ともに中国語だけが並んでいるテキストであり、日本語訳や解説は一切ない。これは宮島を師とする善隣書院出身の中国語教師が口伝による中国語教育を旨としていたためである。戦前までは『官話急就篇』『急就篇』を教科書として使っていた大学も多かったが、ここでも教師は宮島の弟子筋にあたる教師たちや、『官話急就篇』の一部を執筆し、校閲者でもある張廷彦が『官話急就篇』『急就篇』を使い暗誦中心の授業を行っていた。そのため、『官話急就篇』にしても『急就篇』にしてもそれを読むだけで独学ができるように作成されていない。

宮島は『支那語独習書』や通信教育用の『支那語学校講義録』など日本語や解説のあるテキストも編んでいるが、『官話急就篇』『急就篇』は特に広く使われていたため、学習者の間では日本語や文法ポイントを補足した参考書の必要性が高かったと思われる。宮島は『急就篇』を出した翌年の1934年、『急就篇総譯』（以下『総譯』）を刊行した。これは日本語訳のみを列挙し、必要と思われる個所には〔註〕を付して語の説明や文法解説を加えている。

### 2.3 『官話急就篇』と『急就篇』の比較

宮島の代表的教本である『官話急就篇』初版、増訂四版、『急就篇』の構成は以下の通りである。ここでは、構成がほぼ同じである『官話急就篇』増訂四版（以下『官』）と『急就篇』（以下『急』）を取り上げる。

まず、『官』と『急』の構成を比較する。

『官』と『急』で採用された内容について、筆者はすでに詳細な比較・分析を行っている<sup>4)</sup>ので、ここではごく簡単に触れるにとどめたい。「名辞」と「単語」のパートでは、語数が897から711と減少した。『官』から『急』へ削除された単語は310語、追加されたのは133語、共通の単語は586語である。特に固有名詞、地名、物産などは大きく削減されており、時代の推移

---

4) 拙稿「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』における語彙の変化（単語）」（『外国語学研究』14号、大東文化大学大学院外国語学研究科、2013年3月）、同「中国語教本『官話急就篇』と『急就篇』の比較—「問答」の語彙変化—」（『中国語教育』第11号、中国語教育学会、2013年3月）。

官話教科書の日本語訳に関する考察

表1 構成の比較

『官話急就篇』 初版	『官話急就篇』 増訂四版	『急就篇』
1904年	1906年	1933年
發音	名辭	単語
四聲	問答之上	問答之上
名辭	問答之中	問答之中
語法	問答之下	問答之下
問答之上	散語	散語
問答之下	附	附
散語	家庭常語（張廷彦）	家庭常語（張廷彦）
附	應酬須知（張廷彦）	應酬須知（張廷彦）
家庭常語（張廷彦）		
應酬須知（張廷彦）		
全125ページ	全182ページ	全153ページ
善隣書院發行	善隣書院發行	善隣書院發行

がある程度反映されている。

また、「問答」のパートでは以下のような変化があった。ただし、「共通」とした問答でも若干の語の入れ替えはあった。例えば、“他是參贊麼”が“他是秘書官麼”に、“禮拜”が“星期”と変わっているなど、シチュエーションおよび問いと答えの趣旨が同じであれば、一部が違っていても「共通」とした。

表2 問答数の推移

	『官話急就篇』	『急就篇』	削除	追加	共通
問答之上	102	100	12	10	90
問答之中	152	163	34	45	118
問答之下	74	33	62	21	12
合計	328	296	108	76	220

※『急』の「問答之中」で追加された問答は45であるが、この増加分のうち、『官』の「問答之下」で削除されたものから繰り上げられた問答が15回ある。つまり、共通の問答は実際には235となる。

『官』から『急』への、改訂の大きな特徴として、①時代の流れによる名詞の変化、②規範的な表現への訂正、③文語的表現への訂正や故事の追加が行われた、④教養的内容を厚くした、の4点が挙げられる。

①、②について、その理由は想像に難くない。民国の中国語と昭和の日本語に合わせた訂正はその時代に使われる教本としては必須である。また、南北中国での「通語」化もその目的だったという説もある<sup>5)</sup>。しかし、③、④については、故事などの教養的内容を増やしテキストとしての質を上げようとする宮島の意図がうかがえる。

### 3. 『官話急就篇』と『急就篇』の日本語訳の比較

ここでは、構成がほぼ同じである『官』と『急』の3種の日本語訳について比較・検討を加えたい。特に今回は「問答」部分を取り上げる。

『官』の日本語訳テキスト『詳譯』と『基礎』、そして『急』の日本語訳テキストで宮島自身の手による『総譯』、その「問答」の共通部分は235問答であるが、そのうち、日本語訳は以下のように、ほぼ同じものも多い。

- ※1 以下の表で原文の中国語文の番号は『官話急就篇』を基準とする。例：「上」は「問答之上」を指す。
- ※2 中国語は『官話急就篇』の原文だが、そのうち下線部分は『急就篇』では（ ）内の語に入れ替わっていることを示す。

表3 すべて同じ問答の一例

1	來了麼	来ましたか
	來了	来ました

短い一問一答の場合には、3冊ともまったく同じ日本語訳をつけている。しかし、その例は非常に少ない。

以下のように、一問一答の簡単な問答でも、ほぼ同じではあるものの微妙

---

5) 姚偉嘉「『官話急就篇』《急就篇》詞彙比較研究」(2013年6月日本中国語学会関東支部例会発表)。



に異なる日本語訳となっている場合も多い。

表4 ほぼ同じ問答の一例

	『官』『急』	『詳譯』	『基礎』	『総譯』
上6	買不買	買うのですか	買いますか	買いますか
	不買	買わない	買いませぬ	買いません

3冊とも訳文の違いが大きい例も多い。それらについては、(1)主語（一人称、二人称）の有無、(2)三人称、(3)敬語・待遇表現、(4)表現の違いなどに分類できる。以下で紹介する。

### 3.1 主語（一人称、二人称）の有無

宮島の日本語訳には『詳譯』『基礎』とは違い、主語となる一人称や二人称を省いたものが多い。以下にそのうちいくつかの例を示した。

表5 主語の有無が異なる問答の例

	『官』『急』	『詳譯』	『基礎』	『総譯』
上19	爾愛那一個	君はどれを好むか	君はどれを好むか	どれが好きですか
	我愛這個	僕はこれを好みます	僕は此を好みます	これが好きです
上20	爾會不會	君は出来るか	君は出来ますか	出来ますか
	我不會	僕は出来ません	僕は出来ませぬ	出来ません
上56	您請喝茶	貴下どうぞ御茶を御あがりなさい	貴下ドーズ御茶をお上がりなさい	どうぞ御茶を
上60	貴國是那一個	御国は何の国ですか	御国はどこですか	御国はどちらですか
	敵國日本	私の国は日本です	私は日本です	日本です
上69	您到我家罷	貴下僕の宅へ御出なさい	您僕の宅へ御出なさいよ	お寄りください
	改天請安	其内に伺ひませう	いづれ御伺いいたします	その内伺ひます
上93	您不餓麼	貴下は餓じくはありませんか	您是餓じくはありませんか	お腹はお空きになりませんか

上の問答で、宮島の日本語訳では、“我”“您”は訳出されていない。『詳譯』では、「貴下」が多用されており、『基礎』では「您」がそのまま使われている。日本で「あなた」という呼びかけは一般に既知の間柄の会話ではあまり用いられないことを反映している。さらに、「上12」では動詞“喝”も訳出していない。「お茶をどうぞ」という宮島の日本語は非常に自然である。「上60」の場合、「御国はどちらですか」と聞かれれば、日本人なら「日本です」と答えるのが一般的であろう。現在であれば、中国語でも“日本”とだけ答えるかもしれない。謙讓表現の“敵國”は現在、日常会話ではほとんど使われていない。しかし、宮島教本の特徴である「敬語の多用」がここにも表れている。「上69」では、“您”も“我家”も訳されていない。会話のなかでは「お寄りください」だけで、相手を自宅に招いていることがわかるからである。

上の例からも、宮島は一人称を省いた自然な日本語の会話を相応の中国語で表そうとしたことがわかる。

### 3.2 三人称の違い

以下は、三人称“他”の日本語訳が異なる一例である。

	『官』『急』	『詳譯』	『基礎』	『総譯』
上38	他回來了麼	彼は帰って参りましたか	彼は帰って来ましたか	あの人は帰って来ましたか
中85	剛纔他和我說的話，多不講禮	今さき彼が僕に語った話は甚だ無礼である	今方彼が私に話したことは甚だ不都合だ	先刻(さっき)あれが私に言ったことは何と無礼でせう
	他是小孩子不懂甚麼，爾不必怪他	彼は子供で何も解らない 貴下必しも彼を悪く思ふには当らない	彼は小供で何も解らない君は必しも彼を悪く思ふに及ばない	あれは子供だ、何が分かるものか、気に掛けるには及ばない

「上38」では“他”を『詳譯』『基礎』では「彼」としているが、宮島は「あの人」という日本語を当てている。この訳の違いは多くの問答に見られる。宮島が「彼」を採用している例は少ない。『急』で会話の形式となって

いる問答<sup>6)</sup>276のうちで“他”は38カ所で用いられているが、「彼」という訳は3カ所しかなく、『総譯』では「あの人」「あれ」としたり、あるいは訳出されていない場合がほとんどである。

「中85」の場合、中国語のオリジナルテキストは宮島が採用したものだから、子供らしき人物に対して「あれ」と日本語を充てているのは当然といえる。しかし、“他是小孩子”と原文にあるのだから、『詳譯』『基礎』で「彼」としているのは日本語としてはやや不自然だろう。日本人同士の日常会話では、この「彼」という三人称は必ずしも頻用されず、「あの人」や「あの子」などの言い方や、固有名詞を使って示す場合も多いことを宮島はこの「中85」だけに限らず、「問答」全体で日本語訳に反映させている。

### 3.3 敬語を含む待遇表現の違い

次に、敬語を含む待遇表現について比較する。

	『官』『急』	『詳譯』	『基礎』	『総譯』
上15	怎麼了	どうしたのか	どうしたのですか	どうしましたか
	病了	煩いました	病ひました	病気です
上16	怎麼樣	どんな様子ですか	どんな様子ですか	如何です
	好一點兒	少し宜しいです	少し宜しい	少し宜しう御座います
上18	有甚麼事	何事がありますか	何事があるのです	何か御用ですか
	沒甚麼事	何の用事もないです	何事もありませぬ	何も用はありません。
上44	這個在那兒買	此は何処で買いましたか	此は何処で買いましたか	これは何処で御求めになりましたか

上の問答には、“您”“爾”など二人称がないので、どのような日本語表現も想定し得る場だ。しかし宮島は、「どうしましたか」「如何です」「何か御用ですか」「御求めになりましたか」と礼儀正しい日本語にしている。

6) 「問答下」では故事や物語「桃太郎」のような物語も採用されている。

上25	您去過麼	貴下行つたことがありますか	足下は行つたことがありますか	御出になつたことはありますか
-----	------	---------------	----------------	----------------

「上25」でも宮島は二人称の日本語を使わず、しかし“您”のニュアンスを日本語に生かしている。

上81	您府上都好啊	貴下御宅では皆御変わりありませんか	御宅は皆様御丈夫ですか	御宅では皆様御機嫌宜しう御座いますか
-----	--------	-------------------	-------------	--------------------

「上81」では、三者がそれぞれそれなりに“您府上”という中国語の敬語表現を生かそうとしていることはうかがえるものの、宮島の「御機嫌宜しう御座いますか」は特に丁寧かつ上品な日本語である。

上80	您好啊	貴下御変わりはありますか	御機嫌宜しう	お變りありませんか
	好啊您哪	変ありませんあなたさま	達者ですあなた	達者で居ります

「上80」は“客套話”であり、定訳はなく、訳を付けにくい部分である。しかし、三者三様であるが皆丁寧な表現になっている。ここで、“好啊您哪”という答えは、どう解釈すべきか。「あなたは？」という“您呢”なのか、『語言自邇集』(Thomas Francis Wade, 1867)にも見られる二人称尊称の“您納”の意なのか。『官話急就篇』では“哪”を“呢”の意味で使っている箇所が見られるので、“您呢”と解釈することも可能ではある。ただ、太田辰夫「北京語の文法特點」によると、「北京語には二人称の敬称として“您”“您哪”がある」<sup>7)</sup>ので、「あなたさま」とする訳もあり得る。この問答は前後の問答からも“客套話”という扱いであることから、この“好啊您哪”という言い方は慣用表現であったとも思われ、宮島は普通の挨拶として日本語訳を付けており、“您哪”を特に訳していない。

7) 太田1964: 37。

官話教科書の日本語訳に関する考察

中12	拉我到前門（琉璃廠）	私を挽て前門に往け	僕を前門まで拉て行け	琉璃廠まで遣ってくれ
	您給一吊（兩毛）錢罷	貴下一吊錢下さい	您一吊錢下さいよ	二十錢下さい

「中12」は車引きとの問答である。中国語の原文は命令形であるが、宮島はここでも、現地の中国人の車引きに対して乱暴な言葉遣いはしていない。

中41	您要甚麼酒	貴下何酒が要りますか	您何酒が要りますか	御酒は何に致しますかう
中42	您想菜罷	貴下御肴を御考え下さい	您御肴を御考え下さい	お詔へは

「中41」と「中42」は料理店での店員との会話である。ここで取り上げたのは店員の発話部分である。注文を聞いているので、直訳だと場にふさわしくない。「お酒は何にいたしましょう」が店員らしい日本語である。『総譯』には注釈があり、「「想菜」ハ料理ヲ考エルコトニテ料理店ニ於ケル慣用語ナリ」とある。この“菜”は「酒の肴」の意であるが、宮島の「お詔え」は上品な言い方である。

中82	您今兒甚麼時候兒回來	貴下今日何度頃帰って来ますか	您是今日何時頃帰てきますか	今日は何時頃お帰りですか
	得八點鐘以後	八時過ぎにならねば	八時過ぎでなければ…	どうしても八時過ぎだ
	給您豫備晩飯麼	貴下に夕食の用意を致して上げませうか	您に夕食の用意をして上げませうか	夕飯は如何致しますか

「中82」は自宅を出る時の会話である。家人との会話か雇い人との会話かはわからないが、どちらにしても『詳譯』『基礎』の日本語はあまり丁寧な言い方ではないし、“給您豫備”を「～してあげる」と訳しているのも適切ではない。場に合わない言い方のように思われる。

中144	小姪兒今天特意來給老伯 <u>請安</u> （請請安）	小姪兒は今日態態参りまして伯父様の為めに御機嫌を伺います	小姪兒は今日態態伯父様の為めに御機嫌を伺いに参りました	私は今日は御機嫌伺ひに参りました
	勞働駕働們老人家好（這一向康健）	お前御苦勞でした御前等の年寄達は御機嫌宜しいかね	お前御苦勞でしたお前方の年寄達は達者かね	それは有り難う、御父様はお変わりはないかね
	托您福家父很好	貴下の御蔭様で親父は誠に丈夫です	御蔭様で親父は誠に達者です	お陰様で父は至極達者であります

「中144」は“老伯”を訪ねる場面である。『総譯』には、“老伯”とは父の同輩に対する尊称であり、“小姪兒”は“老伯”に対する自称、“老人家”は「御親父ノ意」とある。三者の日本語訳はそれぞれ尊敬表現と謙讓表現を工夫しているが、宮島の日本語訳は“老伯”“働”“働們”など人称を省いていてすっきりしている。

宮島の採用した中国語であるから、宮島がそのシチュエーション設定を生かして日本語訳をつけているのは当然であるが、それにしても宮島の『総譯』は、過剰な尊敬表現もないが、家族や雇い人に対する乱暴な物言いもない。日本人が日常使うような日本語である上に、相手に対する配慮も感じられる。

### 3.4 自然な表現

3.1から3.3まで、宮島と『詳譯』『基礎』との日本語訳の違いを見てきたが、宮島の日本語訳には自然な表現が多く用いられている。

	『官』『急』	『詳譯』	『基礎』	『総譯』
中34	穿好了衣裳了沒有	衣装を着終わりましたか	衣物を着ましたか	仕度は出来ましたか
	我穿好了	私は着整えました	私は着終わりました	出来ました

「中34」で、『詳譯』『基礎』は直訳しているのに対し、宮島は「支度は出来ましたか」「出来ました」という自然な表現にしている。

官話教科書の日本語訳に関する考察

中77	爾是愛吃魚是愛吃肉	君は魚を食べるのが好きですか肉を食べるのが好きですか	君は魚を食べが好きですか肉を食べが好きですか	貴下は魚がお好きですか、肉がお好きですか
-----	-----------	----------------------------	------------------------	----------------------

「中77」で宮島の日本語は、動詞を訳出していない。中国語では動詞が必要な構文であるが、日本語ではこんな場合慣用的に動詞は不要で、『詳譯』『基礎』のように動詞を訳出すると、かなりくどい言い方になってしまう。宮島は自然体の日本語を採用している。

中79	您到敝國是有甚麼公幹	貴下私の国にお出になったのは何の御用	您私共の国にお出になったのは何の御用がおります	此方へはどういふ御用で御入来になりましたか
	我是考察商務來了	私は商業視察に参りました	私は商業視察に参りました	商業觀察に参りました

「中79」では宮島のテキストだけ“您”“敝國”“我”も訳出されておらず、さらに『詳譯』『基礎』の日本語と比べると、「こちらへはどういうご用で～」という自然な日本語の語順となっている。

中98	明兒請您來，我給您豫備點兒吃的	明日はどうぞ貴下御来（いで）なさい私あなたに少し食物を用意してあげませう	明日はどうぞ您御出下さい私は您に少し食事を用意致しますませう	明日どうぞお出で下さい、何か用意致して置きますから
	叫您費心，我必要奉擾的	貴下に御心配をかけます私きっとお妨げ致します	您に御心配をかけます私きっとお邪魔致します	有り難う御座います、是非伺ひます
	不過是家常飯，沒甚麼菜	ほんの宅の不断料理でして何のお菜もありません	いやほんの家での有合のもので何も変わった料理はありません	ほんの有り合わせで何も御座いません

「中98」は、自宅へ食事に招く場面である。宮島の日本語訳には“我”も“您”も訳出されていないし、“吃的”も出てこない。「何か用意致して置きますから」といえば、これで「食事を用意する」という意味になる。相手に気を遣った婉曲な表現になっている。また“沒甚麼菜”も「何も御座居ません」と日本語らしい謙遜表現となっている。『総譯』には注釈があり、“必要

奉擾”は「必ズ御馳走ニ預ラント欲ストノ意」としている。

中131	爾找誰啊	君は誰を尋ねるのです	君は誰を尋ねるのです	誰方（どなた）をお尋ねですか
	我找姓王的	私は王姓の人を尋ねます	私は王姓の人を尋ねるのです	王といふ人を捜しております

「中131」は友人を訪ねている場面だが、二人称は“爾”なので、『詳譯』『基礎』ともに「君」としているが、この場面では宮島の日本語訳が一般的だろう。また“姓王的”を「王姓の人」とすれば直訳すぎよう。

宮島の日本語訳は全体として日常会話らしい自然な日本語を採用しており、場に合わせて、余分な語を省いていながらも意味が十分に通じるものになっている。

#### 4. 宮島の日本語訳の特徴

以上、『官話急就篇』と『急就篇』に共通する問答またはその一部のなかから、『詳譯』『基礎』『総譯』の日本語訳が異なり、宮島の日本語訳に特徴があるものを取り上げた。

その結果として、宮島の日本語訳は他の2冊と違いが大きいことが明らかになった。宮島の日本語訳の特徴とは、主に①主語（一人称、二人称）を訳出しない場合が多く、三人称“他”の訳は「彼」ではない、②敬語表現の多用、③場に合わせた待遇表現を用いており相手に対する配慮がある、④日本語らしい自然な表現となるよう工夫されている、などが挙げられよう。

まず、①に関連し、鐘ヶ江信光は1929年に入学した東京外国語学校で『官話急就篇』によって中国語を学んだ経験を持つが、「急就篇はずばり主語ぬきの『來了麼』『來了』であり、中国語の自然体をそのまま生かした会話書である」<sup>8)</sup>と評価した。さらに、「主語が置いていないというところに抜群の意味がある。会話というものはすべて『場』の中に存在し生きている。一つ

8) 鐘ヶ江1985: 8。



の『場』が設定されているとき、その『場』にふさわしく、そして理解できる最も経済的表現としてのいい方が中国語の生命といっても過言ではない<sup>9)</sup>としている。その意味で、中国語の自然体でテキストを編んだ宮島が、日本語においても自然体を採用したのは当然である。

日本語は会話の中で、中国語よりも主語を省略する場合が多いので、宮島が中国語テキストでは主語を入れていても、日本語訳では主語を入れていない場合が多いのは当然の結果であろう。一方、『基礎』『詳譯』では“您”を「貴下」「足下」「お前」「君」などと工夫して訳し分けている。宮島は自ら採用した中国語の問答に依って『総譯』の日本語訳を付けたので、語の省略は自在にできるが、『基礎』『詳譯』の編者は省略したり、意識したりすることにはためらいがあったのだろう。ゆえに単純に『基礎』『詳譯』の日本語訳が不自然であると言い切ることもできない。宮島が自らが採用した自然体の中国語に合わせ、自然体の日本語を付したということである。

②、③についても宮島らしい品のある日本語が使われていると言える。日常会話であっても敬語を使ったり、相手を尊重する気持ちを示す日本語であり、乱暴な言葉遣いは採用していない。④については、宮島は中国語をできる限り意識し、自然なわかりやすい日本語にしていると言える。

では、これらの特徴はどこからもたらされたのか。

そもそも宮島は『官話急就篇』を編んだ時、日本語をあらかじめ想定してから中国語に訳して問答を採用したのだろうか。東京外国語学校で学んだ井上翠の『松濤自述』によると、「明治三十五、六年の頃松雲程先生の許で勉強していた際、時々宮島先生が談話に来られまして、わたしもよくそれに合いました。その家は靖国神社の裏手で、金国璞<sup>10)</sup>、張廷彦<sup>11)</sup>両氏も同居さ

---

9) 鐘ヶ江1985:7。

10) 生年没年とも不明。北京の京師大学堂を卒業後、1897年に東京外国語学校に招聘された。著書に『談論新編』『支那交際往来公牘』などがある。勲五等旭日章を受章。1903年に帰国した後は、北京でも教鞭を執った。

11) 1864-1929。1897年に高等商業学校に招聘され、善隣書院、陸軍学校のほか東京帝国大学でも教鞭を執り倉石武四郎を教えている。『官話急就篇』の校閲・執筆のほか、『官話文法』『華語啓蒙』など著書多数。

れていました。(中略) 先生はそのころ『急就篇』の編纂に従事されておられたので、それでしばしば張廷彦先生の所へ来られたのでしょう」<sup>12)</sup>という。そして井上によると、『官話急就篇』の「問答之下」(58)の「這是誰的像篇兒啊。我們一家子的。這位老太太是誰啊。(後略)」という問答は張の持つ写真を見て宮島と話した内容がそのまま採用されたものだという。

宮島の教本は自らの中国留学で体得した中国語と、帰国してから金国璞、張廷彦という同僚たちとの会話から練り上げた自然な中国語会話を採用したものだと思われる。特に張廷彦は『官話急就篇』の校閲者でもある。宮島教本の中国語の正確さは張廷彦に依るところが大きい。『官話急就篇』は日本語から中国語に訳してつくられた教本ではないと言える。

よって、『総譯』の日本語はあらかじめ想定されていたものではなく、宮島が自ら『急就篇』の中国語から日本語へと訳したものであり、それは『基礎』『詳譯』の編者と同様である。しかし、宮島にとっては自著であるから、『急就篇』の中国語を自由に意識したり語を省いたりできるという有利さがあったことも確かである。その点を考慮したとしても、宮島の日本語訳は相手を尊重した言葉遣いであり、場に合わせて婉曲な表現や簡潔な表現を用い、自然な日本語の会話となっていると評価できる。

## 結び——宮島の中国語と日本語

宮島の中国語教本に対してはさまざまな評価がある。

まず、宮島の教本で学んだ経験を持つ、中国語教育の泰斗による評価から紹介する。倉石武四郎は『中国語五十年』のなかで、直接『急就篇』という書名は挙げていないものの、「日常の会話に重きを置くことは結構であるが、会話の妙味は、かならずしも会話教科書の暗誦のみによっては、理解されないものがある」<sup>13)</sup>としている。安藤彦太郎は『中国語と近代日本』で名著と

---

12) 井上1950: 16。

13) 倉石1973: 76。

評価しつつも、問答体教科書だけでは中国理解につながりにくいとし、六角恒廣も「内容において他の追従をゆるさないものをもっていった」<sup>14)</sup>と高く評価しているものの、「全体の語句や文の配列には、あまり難易や文法的考慮がなされておらず、清朝時代の封建中国の世界を映した中国語といえる」<sup>15)</sup>とした。さらに伊地智善継は「わたくしと中国語教科書」で、「急就篇的会話教科書を学校では全然使わなかった」とし、その理由として「第一、これらのテキストの言語の伝達する内容にがまんができなかったことである。具体的にいえば、その思想は老人的であり、非科学的であり、実利的であり、立身出世的であり、時には非人間的でさえあったのだ」と書いている<sup>16)</sup>。「古くさい」という批判は1920年代にすでに東京外国語学校の神谷衡平からも出ている。

しかし、鐘ヶ江信光は「その表現は平明にして雅、日常的にして格調高く、美しい音律を兼ね備えた名著である」<sup>17)</sup>と評価しているし、高等師範学校で『急就篇』の授業を受けた牛島徳次は『中国語、その魅力と魔力』で、「『支那語』の学習は意外にもむずかしく、困難なことだとはわかったが、これは現代の『支那』の人たちが使っている生きた『ことば』の学習で、『なぜ』解きの『漢文』の学習とは全く趣を異にする、新しい領域への挑戦だった。『支那語』はおもしろい、授業の回数が増すにつれ、わたしは心からそう思えるようになった」<sup>18)</sup>と『急就篇』による授業を回顧している。

また、李仲剛は『現代華語読本』の「自序」で「余経験之所得、認為最適日本青年之初習語學之善本、唯官話急就篇一書」と『官話急就篇』を高く評価しており、近年に至って、王順洪・名和敏光「日本中国語教育的道路」でも“比起当时的其他汉语教材，语言标准，内容精炼，现实感强，便于携带，

---

14) 六角1961: 96。

15) 六角1988: 221。

16) 伊地智1960: 9。

17) 鐘ヶ江1999。

18) 牛島1996: 206。

非常合适于初、中级汉语学习的程度的人使用，因而倍受欢迎。”<sup>19)</sup>とネイティブからも高い評価を得ている。

宮島教本を分析し、検討した結果として、『官話急就篇』『急就篇』ともに、清末民初の中国の大きな動きやその後の急変する国際情勢などを反映した教本とはいいい難いものの、正確な中国語に裏打ちされ、選び抜かれた会話に加えて故事も紹介し、中国との交流に必須の知識も提供したレベルの高い教本であるという結論を得た<sup>20)</sup>。

さらに今回、『急就篇総譯』の日本語を検討した結果、宮島は中国語だけでなく、前述の鍾ヶ江の言葉を借りれば、「平明にして雅、日常的にして格調高い」日本語を、学習者に提供していたといえるだろう。

その宮島の日本語はその武家という出自に深く関係しているに違いない。宮島は米沢藩の武家に生まれ、明治政府の高級官僚であった父について東京に転居し、少年時代は中国公使や勝海舟らとの交流もあった。インテリ階級の中流家庭で育った彼の日本語は家庭のなかで自然に育まれたものがベースになっている。

一般的な会話については日本語らしい自然な流れとなっているのはもちろん、例えば雇い人に対して中国語は命令形になっている文であっても、日本語訳では乱暴な言い方になっていない。3.3で示した例のように、「～行け」（『詳譯』）ではなく「やってくれ」、「持ってこい」（『詳譯』）ではなく「持ってきてくれ」という表現になっている。これらにも宮島の育ちの良さ、文人らしさが現れている。

宮島は生涯、父詠一郎、勝海舟、張裕釗から得た薫陶を抱き続け、中国、中国文化、中国人に対する共感を持ちつづけていた。しかし、宮島の心情とは裏腹に、明治初期には存在した清国との友好関係は徐々に変化し、日清戦争後は日本国民の間に中国に対する軽視が生まれ、政府・軍部の政策が大陸

---

19) 王・名和2006: 25。

20) 拙著、前掲「近代日本における中国語教育に関する総合研究」。

侵略に向かうにつれ、軽視は蔑視となっていく。父や勝海舟とともに、中国文化を愛し、「日中不戦」を説いていた宮島は昭和にはいると公的な場での発言も少なくなり、教育者・書家として隠棲するようになる。そんな環境で、昭和恐慌により宮島が私財を投じて行ってきた善隣書院の経営も苦しくなり、経営を支えるためという理由もあり、1933年と1937年、2回に分けて文部省から助成金を受け『急就篇』と『急就篇総譯』その他の教本を出版している<sup>21)</sup>。『急就篇』は約2万部売れたとされ、『急就篇総譯』は手元の1939年のものが第18版となっており、5年間で18回増刷されている。

中国語教育者として名高い宮島の『急就篇』は、「古くさい」と批判を浴びながらも、当時流行っていた「満州語」も使わず、教養重視の内容となっている点において、宮島が日中戦争に突入した時代にあっても、父や勝海舟ゆかりの「日本と中国は兄弟の国」という考えや、彼らが明治中期に唱えた「興亜主義」（アジア主義）に基づく自らの立場を明確にしたものだとも考えられる。さらに、中国語だけの『急就篇』ではその意が十分には世の中に伝わらない可能性もあるがゆえに、『急就篇総譯』の格調高い日本語によって、自らの真意を明らかにしたという推測も可能であろう。

『急就篇総譯』が刊行された1934年といえば、満州国が帝政に移行した年である。満州事変後、日中戦争が始まり、日本は国際連盟も脱退し、「五族共和」などのスローガンで中国大陆での利権獲得のため植民地政策を拡大していった時期である。全国から満蒙移民が大陸へと渡っていった。中国語（当時は「支那語」）ラジオ講座も始まり、学習者も増えたが、この時期に出された中国語教本を見ると、なかには現地の人びとを取り締まったり尋問したりするための「兵隊支那語」というような体系的でないものもあり、また「満州語」教本が発行されるなど、玉石混交の状態であった。

竹内好が明治から昭和にかけての中国語教育を「行商支那語」と「兵隊

21) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B05015891500、研究助成関係雑件／出版助成関係雑件 第二巻 (B-H-06-02-00-04-00-00-02) (外務省外交史料館)。

支那語」としていることに対し、安藤彦太郎は『近代日本と中国語』のなかで、「興亜」という面もあったとして反論しているが<sup>22)</sup>、まさに宮島は「興亜」をベースとした中国語教育を行った一人だといえる。

一方、魚返善雄は、日中戦争のさなかの1942年に発表した「支那語界・回顧と展望」で、支那語は大陸進出と結び付けられており、それは現実の支那に即応する国策的な方途である、と当時の中国語教育のあり方に疑義を投げ掛けている。戦争中の、このような若き研究者の出現が戦後の中国語研究発展につながっていくのである。まさに宮島大八の晩年に中国語界に登場した魚返善雄は、一見すると宮島とは正反対の科学研究を提唱した学者ではあるが、彼の主張からは、宮島の中国、中国人への共感の部分の遺伝子を受け継いだと思える個所も少なくない。そしてその遺伝子こそが、中国語教育において今後も長く受け継がれていくべきものではないだろうか。

宮島は官職につくことを潔しとせず、民間の学校で全人教育を行い続けた。通訳養成のために設立された東京外国語学校で行われた中国語教育、また、そこから巣立った教師たちによる中国語を大陸進出のツールとする中国語教育とは異なる、高邁廉潔と評された宮島による中国語教育は、アジア主義に同調する人びとを引きつけたであろう。それは、清国留学で師とした張裕釗が政治の動きに巻き込まれ書院を追われたことにも影響を受けたに違いない。張裕釗の清廉な生き方、学問に身を捧げ、弟子に全人教育を施すその姿勢に、宮島はその教育者としての基盤を見出し、その師の身の処し方と同様、表舞台に出ることなく、教育者としてその一生を全うした。

その宮島がつくった『官話急就篇』『急就篇』『急就篇総譯』には、中国語にも日本語にも日常的な自然な会話が盛り込まれ、中国人を隣人として尊重する姿勢が底辺にある。現代の日本における中国語教育で使われているテキストには、すでに戦前の中国蔑視の内容はあり得るはずもない。しかし、国家間では日中関係が冷え込んでいる現在、そこから関係改善に向けて、相互理解のため、互いの心に触れられるようなさらに一歩踏み込んだ内容を持つ

---

22) 安藤1988: 16。

テキストが望まれる。そこで使われるのは「表現は平明にして雅、日常的にして格調高く、美しい音律を兼ね備えた」中国語であってほしい。

#### 参考文献

- 安藤彦太郎（1988）『中国語と近代日本』岩波新書  
伊地智善継（1960）「わたくしと中国語教科書」『中国語学』第104号  
井上翠（1950）『松濤自述』大阪外国語大学中国語研究会  
魚返善雄（1942）「支那語界・回顧と展望」『中国文学』第83号，生活社  
牛島徳次（1996）『中国語、その魅力と魔力』同学社  
王順洪・名和敏光（2006）「日本中国語教育的道路」『山梨国際研究』第1号，山梨県立大学  
太田辰夫（1964）「北京語の文法特點」『中国語文論集』汲古書院  
金丸邦三（1999）「東京外国語学校から東京外国語大学へ」『東京外国語大学史』pp. 912-952  
鐘ヶ江信光（1985）「中国語研究六十年—私の歩んだ半生—」『歴史と未来』12号，東京外国語大学中嶋嶺雄研究室  
鐘ヶ江信光（1999）「外語とともに70年」「東京外国語大学百周年」リーフレット，東京外国語大学  
倉石武四郎（1941）『支那語教育の理論と実際』岩波書店  
倉石武四郎（1973）『中国語五十年』岩波新書  
那須清（1972）「急就篇の語彙」『文学論輯』第19号，北九州大学文学研究会，pp. 1-29  
李仲剛（1932）『現代華語読本』大連：大阪屋号書店  
六角恒廣（1961）『近代日本の中国語教育』播磨書房  
六角恒廣（1988）『中国語教育史の研究』東方書店  
六角恒廣（1994）『中国語書誌』不二出版  
六角恒廣（1999）『漢語師家伝—中国語教育の先人たち—』東方書店

板垣友子 Itagaki Tomoko 杏林大学非常勤講師 専門：中国語教育史・中国語教材研究